

## 患者にとって効果的な・安楽を目指した おむつ交換への取り組み

名古屋第一赤十字病院 神経内科

○坂口 真那美、園田 玲子、須永 康代

神経内科病棟では、その疾患の特徴上、排泄ケアが必要な患者が全患者の半数以上を占める。今年度、看護部は病院全体のおむつ交換の見直しを計画した。患者側からは、患者にあった効果的なおむつ交換ができるように、看護師側からは、現状のおむつ交換に費やされる労力と時間を減少させることを目的に勉強会を計画した。そして、神経内科病棟をモデル病棟としておむつ交換の見直しをした。

【実施期間】2015年1月～8月

【方法】1) 院内のおむつ交換について現状調査をする。2) 結果をもとに患者に合わせた効果的なおむつ交換についてエリエール社アドバイザーと会議を開き対策を検討する。3) 病棟スタッフを対象におむつの特徴・基本的な当て方・尿もれを防ぐ方法などの勉強会を開催する。4) 患者のおむつ交換時間・おむつの種類を検討する。多忙な看護業務の中でもおむつ交換には多大な時間と労力を費やしている。そのおむつ交換を効果的に行うことは患者の負担の軽減や安眠の援助につながる。また、おむつ交換に要する時間を短縮させることで、看護師の排泄援助に関する業務負担を軽減させることになり、ほかの生活援助業務につなげることができる。個々の患者に合った効果的なおむつ交換を目指した取り組みをおこなったので報告する。

## P-4B-259

### 「口から食べる」ことを取り戻すための関わり

唐津赤十字病院 看護部

○岩崎 里恵、湯地 真澄

【はじめに】当院では嚥下障害のある患者に対して摂食・嚥下障害看護認定看護師が介入している。また、言語聴覚士と協働し、スクリーニングテストや嚥下訓練を実施している。今回、病棟看護師との連携により経腸栄養から完全経口摂取に移行できた2症例について報告する。

【症例1】89歳男性 アテローム性脳梗塞嘔吐による肺炎合併のため経腸栄養(EN)を選択した。しかし食道裂孔ヘルニアによる経鼻経管栄養チューブ挿入困難と胃食道逆流を認めたため栄養剤を変更し、注入時間や体位を工夫するなど随時検討し栄養管理を行った。44病日、嚥下スクリーニングではMWST3点、FT4点(DSS4)、左の口角下垂と挺舌時は左に偏倚を認めた。45病日、嚥下訓練食を開始、50病日に嚥下内視鏡で確認後病棟看護師の協力を得て食事時の体位や、介助方法などの食事介助の統一を図った。57病日完全経口摂取に移行した。

【症例2】79歳男性 誤嚥性肺炎脳梗塞後遺症による血管性認知症があり夜間の不穏に対し眠剤が投与されていた。そのため日中の覚醒状態は不良で嚥下訓練は困難であった。入院5病日より介入し、嚥下スクリーニングを施行した。MWST(変法)3点FT3点(DSS3)挺舌時には左に偏倚があり、左口角下垂口唇閉鎖不全を認めた。医師、病棟看護師の協力を得て薬剤の整理を行い、昼夜のリズムを取り戻すよう覚醒を促した。5病日よりEN開始、21病日ゼリーを用いた直接訓練を開始した。37病日完全経口摂取に移行した。

【まとめ】食事介助に直接関わる病棟看護師をはじめとする他職種との協力が奏功し、再び口から食べることができた。患者の回復状態に合わせて適切な嚥下評価を行い、環境を含めた患者を取り巻くすべてのことに着目することが重要である。また、他職種の特性を生かした関わりと個別性のある援助が必要であると考ええる。

## P-5B-261

### 呼吸ケアチーム主導による 院内教育システム構築に向けた取り組み

武蔵野赤十字病院 呼吸ケアチーム

○石田 恵充佳、小林 圭子

【取り組みの背景と目的】これまで当院で提供されてきた呼吸関連の学習機会は、主に部署内で企画される学習会と、年一回の院内講座であった。部署内学習会は伝聞的な学習形態であり、最新の知見を学ぶ機会に恵まれているとはいえない状態である。学習者のニーズ充足や満足度向上を可能にするためには、組織が支援する効果的で効率的、魅力的な学習機会の提供が欠かせない。そこで、呼吸ケアチーム(以下、RCT)が、人工呼吸器装着期間の短縮や人工呼吸器装着患者の安全管理とケア向上という一般的な役割を越えて、呼吸管理とケアに関する知識とスキルの普及を目的とした体系的な教育システムの構築に向けた取り組みを開始した。

【方法】学習会をより効果的、効率的、魅力的にするために、1) 学習会開催日時と参加によって獲得できる具体的な到達目標の事前告知、2) 学習会開始時・中・後に、オーディエンス・レスポンス・システム(ARS)による参加者の理解度確認、3) ARSの結果に基づく即時でのフレキシブルな研修内容調整、4) 人工呼吸器シミュレーターの使用によるより実践的な講義内容を組み込んだ。

【実例】ARSや人工呼吸器シミュレーター使用時は事例を提示し、観察視点や対応方法を参加者が考え、発言する参加型の学習会になるように工夫した。また、新たな知識獲得だけでなく反復学習の機会を設けた。

【評価】学習会参加者総数は203名であった。学習会の構成に対する評価は、ARSが示した目標達成率、学習会後アンケート結果から判断した。参加者個々の目標達成度、理解度は85%以上を示し、また、高い満足度が示された。今回の取り組みは、学習会の質の向上に有効であると評価する。

【今後の課題】一部の学習機会に適用して効果が確認できた今回の取り組みを、今後はRCTとして提供したい学習内容全体に適用していきたい。

## 当院におけるスキントア予防の現状と課題

益田赤十字病院 看護部

○檜谷 みどり

【目的】近年、高齢者の四肢に起こる「外傷性の創傷」を示す「Skin Tear」は各施設で報告されている。皮膚の保湿や保護が予防に効果的であるとされているため、研修会後の実態調査を行いその効果を検討した。

【方法】スキントアナースを含む職員対象に知識を提供し、6か月後実態調査を行った。

調査期間：平成26年11月15日～平成27年5月15日

【倫理的配慮】個人が特定されないように配慮した。

【結果】スキントアナースを含む職員対象の研修会に34名の参加があった。直後の調査日のスキントアは5名、有病率は2.26%であった。研修会ではスキントア概念、STAR分類システム、ケア方法(皮弁がある場合は戻す、銀含有シリコンゲル粘着性親水性ポリウレタンフォームドレッシング以下銀含有ドレッシングとする使用)、2回/日の保湿、皮膚の保護について提供した。6か月後の調査日のスキントアは2名、有病率は0.78%であった。

症例1：80代女性。入浴介助時、左手背に発生。カテゴリー1a。

抗生剤軟膏、シリコンゲルドレッシング、チューブ包帯使用、保湿剤の使用無し。

症例2：80代男性。粘着テープ剥離時、右前腕に発生。カテゴリー2a。

銀含有ドレッシング使用、保湿剤の使用無し。

【考察】調査日の有病率は、6か月後減少していた。スキントア保有者に対しての処置方法はシリコンゲル系のドレッシング材を使用できている、適切な方法であった。チューブ包帯での保護も行っていた。しかし、保湿剤による保湿は2例とも行われておらず、研修会での知識がケア提供に結び付けられていなかった。有病率は減少しているが、保湿が行われていなかったため、皮膚の保湿や保護がスキントア予防に効果的であるとは判断できない。今後、予防ケアの定着に取り組む必要がある。

【結論】当院での上記期間で、皮膚の保湿や保護がスキントア予防に効果的であるということは明らかにできなかった。

## P-5B-260

### 看護師への弾性ストッキングの装着方法に関する 教育介入の効果

飯山赤十字病院 看護部

○東福寺 加奈、篠原 千永子、金子 あゆみ

【はじめに】当院では、弾性ストッキングを用いてVTE発症予防を図っているが、皮膚トラブルが起るケースを経験している。原因は様々だが、どの看護師であっても標準的な方法での装着、装着後の観察が適切にできることを目指したいと考えた。そこで、弾性ストッキングの標準的な装着方法を行うためのアクティブラーニングを用いた教育介入(以下、介入)と、介入前後での装着方法と知識の比較から、介入の効果を検討した。

【方法】手技観察とアンケートによる介入前の実態調査を実施。その後デモンストレーションと講義による介入を行い、介入前と同様の実態調査を行い、介入の効果を確認した。

【結果】介入前後で実施率・正答率の上昇が見られた項目と低下した項目、変化が見られない項目があった。

【考察】(対象の属性)弾性ストッキングの勉強会への参加経験と部署配属年数から手技・知識不足が想定された。(装着方法の手技獲得)対象者の多くが初めて知る手技があり、興味や関心が高まり、実施率が大幅に上昇した項目があったが、実施率が低下した項目もあり、緊張などの心理的状況と条件を一定にするための下肢モデルの使用が影響した可能性が考えられた。(知識量増加)実際に使用している物品を用いてのデモンストレーションと、対象者参加型の講義を行ったため、知識量増加が見られた。(アクティブラーニングの効果)介入で講義中心であった項目は、正答率・実施率の低下が見られ、知識や手技が獲得され、定着したとは言えない。しかし、講義を踏まえた上デモンストレーションを行い、自ら体験した項目は実施率の上昇や正答率の上昇の変化が見られた。

## P-5B-262

### A看護専門学校における広報活性化への取り組みについて

石巻赤十字病院 看護専門学校

○木村 富貴美、佐々木 浩子、末永 悦子

【はじめに】A看護専門学校(当校)は、東日本大震災で壊滅的な被害を受けた。その為、震災後1年目は近隣の大学の一部を借用、2年目以降は仮設校舎で学校運営を行うという制約された環境を余儀なくされ、震災の影響で学生確保が困難になることが予測された。そこで新たに広報担当者置き、震災前と変わらない良質な学生確保を図ることを目的に広報活動の活性化を図った。今回その取り組みについて報告する。

【方法】広報担当者を決め、定期的に広報会議を開催した。更に、病院広報委員会や本社主催の広報担当者研修会へ参加し多様な広報戦略を学んだ。また病院総務企画課企画広報係と連携して広報活動をするめた。

【結果】1. 学生募集パンフレットに使用する写真をプロの方に依頼し、生き生きとした学生の表情を撮ることができた。2. ホームページの更新回数を年1回から行事ごとに更新することができた。3. 院内誌の学校通信欄の確保や日赤健康まつりで看護学校ブースを設置する等、学校をアピールする機会を増やすことができた。4. 震災前とほぼ変わらない倍率を確保する事ができた。

【まとめ】担当者が明確になる事で意図的な広報活動ができたと考えられる。また、広報研修会へ参加し、その内容から多くを学ぶ事ができた。広報研修会では、他施設の広報活動について知ることができ、意識の向上につながった。仮設校舎という限られた施設での受験生確保に向けて広報の活性化に取り組んだ結果、震災前と変わらない倍率を確保することができた。今年度は新校舎へ移転し、格段に充実した施設となった。これを強みと捉え、更に良質な学生確保のための広報活動を充実させていきたい。